

令和2年度

岡山大学大学院保健学研究科

博士学位申請論文

内容要旨

看護学分野

中塚 幹也 教授 指導

73425002

古谷 ミチヨ

令和2年12月提出

内 容 目 次

主 論 文

Gender Expression among Transgender Women in Japan:
Support Is Needed to Improve Social Passing as a Woman

(トランスジェンダー女性の性別表現：パス度向上のための支援ニーズ)

古谷 ミチヨ, Zhou Yu, 中塚 幹也

Acta Medica Okayama 掲載予定

主 論 文

Gender Expression among Transgender Women in Japan:

Support Is Needed to Improve Social Passing as a Woman

(トランスジェンダー女性の性別表現：パス度向上のための支援ニーズ)

[緒言]

性別違和：Gender dysphoria (GD) は、一般的に Transgender Women (TW) と Transgender Men (TM) とに分類される。性別適合手術：sex reassignment surgery (SRS) の施行にあたっては1年以上の実生活経験：real life experience (RLE) の継続実績があることが推奨されている。また、SRSを施行しない場合でもRLEを希望するTW当事者は多い。また、経済的に自立してRLEを行うには就労が不可欠であるが、就職には外見が望む性別で通用する度合い（パス度）が大きく影響する。特に、TW当事者の身体の男性的特徴は女性ホルモン剤では変化しないため、パス度の向上は望めないことが多く、その他の方法が重要となる。

本研究では、TW当事者のパス度に影響する女性としての性別表現の実態やそれに対する支援ニーズ、支援を受けた経験について調査し、支援のあり方を検討した。

[方法]

TW当事者54名を対象に、女性としての性別表現ニーズと実践経験、支援ニーズと支援を受けた経験を明らかにし、背景因子との関連を検討した。性別表現ニーズと実践経験に関する質問は「体型への対応」「肥満への対応」「皮膚・髪 of 整容」「立ち居ふるまい」「言葉使い・発声」「公共設備等の使用」の6つを大項目とし、各々に2～10の具体的な性別表現項目を設定した。回答には「行う必要がある」「行う必要はない」の2肢を、「行う必要がある」には「行っている」「行ったが難しくてやめた」「行っていない」の3肢を設定した。支援ニーズと支援を受けた経験に関する質問には、性別表現ニーズと実践経験の大項目6つに対応する10の支援項目を選択肢として設定した。統計学的解析にはSPSS version 24のFisher's exact testを用いて $p < 0.05$ を有意差ありとした。所属研究科倫理委員会の承認と（No.D13-04）、研究協力機関・団体、対象へのインフォームドコンセントを得て実施した。

[結果]

対象の年齢は 45.5 ± 12.6 (mean \pm S.D.) 歳で、既往の治療内容は精神科診療77.8%、女性ホルモン (estrogen) 投与92.6%、SRS46.3%であった。戸籍上の性別変更例は24.0%、女性としての生活をフルタイムで送っている例は61.1%であった。

女性としての性別表現ニーズと実践経験について、「体型への対応」に関する性別表現項目を見てみると、それぞれ44.4～88.9%が「行う必要がある」と回答し、このうち「行

っている」との回答は「スリーサイズの測定」が 87.0%と高率であり、「行ったが難しくてやめた」との回答は「ボディースーツの着用」が 8.3%、「行っていない」は「ボディースーツの着用」が 29.2%であった。その他の性別表現項目を見てみると、「肥満への対応」については、それぞれ 85.2~87.0%が「行う必要がある」と回答し、このうち「行っている」との回答は「太りすぎないための食事管理」が 72.3%、「行ったが難しくてやめた」との回答は「太りすぎないための運動」が 17.4%、「行っていない」は「運動」が 32.6%であった。「皮膚・髪のリメイク」については、それぞれ 68.5~98.1%が「行う必要がある」と回答し、このうち「行っている」との回答は「無駄毛の処理」が 100%と高率で、「行ったが難しくてやめた」との回答は「髪の色の変更」が 16.2%、「行っていない」は「髪の色の変更」が 18.9%であった。「立ち居ふるまい」については、それぞれ 74.1~87.0%が「行う必要がある」と回答し、このうち「行っている」との回答は「がに股にならないように注意した歩行」が 95.0%と高率で、「行ったが難しくてやめた」との回答は「女性としてふさわしいしぐさ」が 2.2%、「行っていない」は「女性としてふさわしいしぐさ」が 15.2%であった。「言葉使い・発声」については、それぞれ 74.1~81.5%が「行う必要がある」と回答し、このうち「行っている」との回答は「女性としてふさわしい言葉使い」が 77.3%、「行ったが難しくてやめた」との回答は「地声より高めの声での会話」が 7.5%、「行っていない」は「ふさわしい言葉使い」が 20.5%であった。「公共設備等の使用」については、それぞれ 68.5~96.3%が「行う必要がある」と回答し、このうち「行っている」との回答は「女性用トイレ使用」が 84.6%と高率で、「行ったが難しくてやめた」との回答は「女性用トイレ使用」が 3.8%、「行っていない」は「女性専用サービスの利用」が 22.0%であった。

「体型への対応」「言葉使い・発声」「公共設備等の使用」の実践経験は、ホルモン療法や SRS 施行、女性としての生活状態との間に有意な関連が見られた。

性別表現に対する支援ニーズと支援を受けた経験について、支援項目ごとに支援を受けたいが受けていない者の割合を見たところ、それぞれ 32.0~90.9%で、支援ニーズとそれを受けた経験は年齢、SRS 施行、女性としての生活状態との間に有意な関連が見られた。

[考察]

ホルモン療法による体型の変化に対応を要する TW 当事者は高率であったが実践や継続は比較的困難で、「下着の選び方・着け方」に関する支援を受ける機会は得難く、特に SRS 未施行の方が施行者よりも支援を受け難いと考えられた。ジェンダー支援の専門職は下着メーカー等と連携し、治療状況を考慮した商品紹介や着用方法のデモンストレーション等を行う必要がある。RLE を私生活のみで行っている者はフルタイムで行っている者よりも「ファッション」に関する支援希望が高率であったことから、生活事情を考慮した上で積極的な情報提供を行う必要がある。

食事や運動による肥満予防を要する者は高率であったが実践や継続は困難で、「ダイエ

ット」に関する支援を受ける機会が得難いことから、取組みのきっかけ作りや習慣化が難しいと考えられた。そのため、運動や栄養の専門家と連携して運動や献立の紹介、実施状況のチェック等を行う必要がある。

女性としての皮膚や髪を整容を要する者は高率で実行・継続は比較的しやすかったが、「髪や頭皮のケア」等に関する支援を受ける機会が得難いと考えられた。また、RLE が私生活のみの者はフルタイムの者よりも「女性的なヘアスタイル」等の実践や継続が困難で、「メイクアップ」に関する支援を受ける機会が得難いと考えられた。支援職者は美容の専門家と連携し、講習会の企画や女性としての生活状況を考慮したメイクアップ方法の紹介等について検討する必要がある。

女性的な立ち居ふるまいを要する者は高率で実行や継続は比較的しやすかったが、「立ち居ふるまい・しぐさ」に関する支援を受ける機会が得難いと考えられたため、パス度の高いTW当事者との協働やマナーの専門家との連携を図り、支援する必要がある。

女性としての言葉使いや発声を要する者は高率であったが、実践や継続は比較的困難で、「ボイストレーニング」や「会話・コミュニケーション」に関する支援を受ける機会が得難いと考えられた。RLE が私生活のみの者はフルタイムの者よりも「ふさわしい言葉使い」の実践や継続が難しいと考えられるため、ボイストレーナーや話し方のアドバイザー等と連携し、発声のセルフトレーニング法や女性として違和感のない会話スキルの紹介等を行う必要がある。

女性用公共設備の使用を要する者は高率であったが、実践や継続が比較的しやすい行動と実践が比較的困難な行動があった。SRS 未施行者は施行者よりも全ての行動で実践や継続が困難であり、外性器の状態や戸籍上男性であることの影響が考えられた。TW当事者が女性用公共設備を安心して利用するためには、当事者のニーズに応じて支援全般に取り組む必要がある。

[結論]

TW 当事者の女性としての性別表現に関する実態と支援ニーズには各種背景因子が影響しており、生活支援の必要性が明らかになった。ジェンダー支援の専門職は医療者間の連携に限らず、あらゆる分野の専門職協働をコーディネートし支援体制を整える必要がある。